

情報記号論の諸問題

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

石田英敬

研究室：駒場キャンパス9号館323

MAIL： nulptyx@boz.c.u-tokyo.ac.jp

URL： <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~nulptyx>
<http://www.nulptyx.com/>

授業受講者のためのコーナー コミュニケーション・シートについて

第一回目のコミュニケーションシートを提出してもらいました。大体様子は分かりました。幾つかの感想と教官からの回答を述べます。

第5回講義
「記号の概念をめぐって」
(その4)

目次

- I. **Problematic** Ecce Signum 或いは〈記号〉
の問題論的起源(第2回)
- II. **Archeology** 〈人工記号〉の記号論(第2回)
- III. **Epistemology** 現代記号論の〈記号〉仮説
(第3回)
- IV. **Interface** 〈記号〉と〈情報〉
(前回そして今日、そして・・・?)

Interface

IV <記号>と<情報>

I

ソシユール記号学の基本概念と <記号と情報>問題(続)

ソシユールの基本概念

1. Sa / Sé をめぐって
2. 記号の恣意性とシステム
3. かたちの単位としての分節
4. 「差異のシステム」と記号の「価値」
5. paradime / syntagme (今日)
6. ラングとパロール(今日)

意味を微分する

- ソシュールの「記号」理論の基本にあるのは「意味」を「微分」して「形式化」するという構想であろう。
- 「音物質」から「かたち form」のみを抽出し、その「かたち」を微分することによって分節単位をベースとした「記号」の「差異のシステム」を取り出すこと、これが「記号学」のオペレーションである。
- 「記号」という「形式」は、「心的」なレベルにおいて成立する「かたちのシステム」であって、「物質」や「生理」からは独立している。(したがって、マルチメディアで成立可能)

5 paradime / syntagme

記号の現働化の二つの軸

と

記号実現の「線条性」のテーゼ

(← シニフィアンの線条性)

(→ 前回配布資料1参照)

Paradigme (範列)

「範列(パラディグム)」とは、ひとつの言述(パロール)が実現するときに、記号の現働化を規定している記号間の「連合関係」のこと。

「範列」は「不在状態in absentia」において記号の実現に関与している。

この連合関係は「脳に座をもち、virtuelleな記憶において成立する」(ソシユール)

サンタグム(連辞)

「連辞(サンタグム)」とは、ひとつの記号の実現の次につづく記号の実現の系列を指定している「結合関係」のこと。

連辞は記号実現に「現前状態 in praesentia」で関与する。

この結合関係は「discoursにおいて言語の線条性に基づいて成立する」(ソシユール)

『一般言語学講義』第II部5章

- 「ディスクール」と「ヴァーチャルな記憶」

(→ 前回配布資料1参照)

6 ラングとパロール

ソシュールは、記号活動の実現の出来事を「ことば パロール la parole」として、記号のシステムとしての「言語体系 ラング la langue」と区別し、ことば(パロール)の実現の心的な規則として、「範列(パラディグム) le paradigme」と「連辞(サンタグム) le syntagme」という二つの軸を提示した。

→ [前回資料1](#)

意味実現のメカニズム

- 記号はヴァーチャルな記憶状態において離散的 (discrete) な特徴をもつ要素のシステムとして成り立っており、ディスクールにおいては線条的 (linear) に実現 (= 現働化) する。

音素から形態素へ : 離散性

統語論へ : 線条性

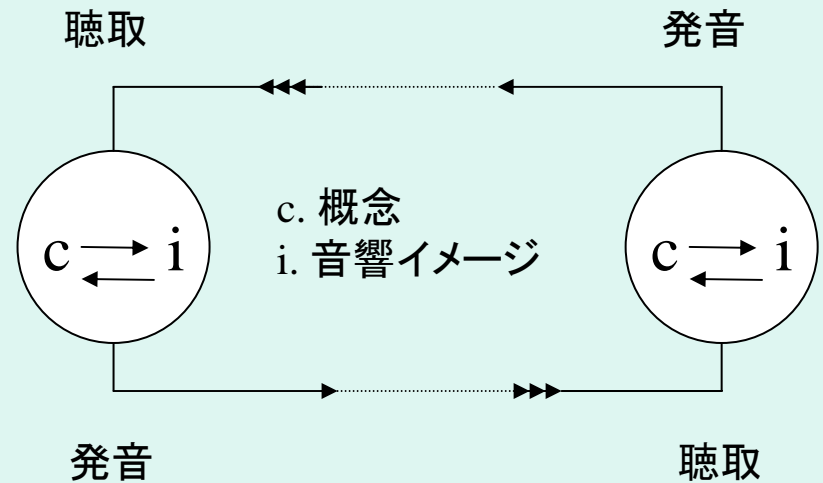
電話モデルの認識系

- 「音素」のような記号は脳のなかにヴァーチャルな記憶状態において離散的システムとして書き込まれており、「話線(ディスクール)」をとおして一つずつ継起的に実現する。
- 「脳」と「技術回路」とを結ぶ認識系としての「記号の知」の「回路」の成立
音声記録装置(アナログ記録テクノロジーの graph)
が書き取った「記号」のエコノミー

コミュニケーション図式

ソシユール 「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“PLACE DE LA LANGUE
DANS LES FAITS DE LANGAGE”
を省略させていただきます。



『一般言語学講義』第I部3章

- 「ことばの回路」と「言語の位置」
(→ 前回配布資料1参照)

「記号」のEpistémè

- 恣意性
- 形式/分節
- システム
- 差異/弁別
- 離散性
- 範列/連辞
- 線条性
- 潜勢態と現働化
などの諸点を通して特徴づけられる

「情報」も同じエピステーメーに属している？

Interface 1 記号と情報

- 記号の差異のシステムは二進法で記述可能？ (cf. Leibniz)
- 記号実現の線条性を支えている連辞性の規則は数理化可能であり究極的にはアルゴリズム化するのか？ (cf. Chomsky)

→ 言語機械とチューリング機械

＜言語＞という心的装置

1. 「恣意性」の原理 → 分節にもとづく形式のシステムとして＜言語＞を記述することができる（二進法化を可能にする原理）
2. 「線条性」の原理 → 技術回路を通して伝達される記号列において記号実現を考えることができる（「シンタックス」化を可能にする原理）
3. 「差異」化（＝究極的にはデジタル化？）・文法化（＝究極的にはアルゴリズム化？）をおこなっているのはe-micな＜言語＞の「心的形式化の装置」

『一般言語学講義』第II部1章

- 「第一原理：言語記号の恣意性」と「第二原理：シニフィアンの線条性」

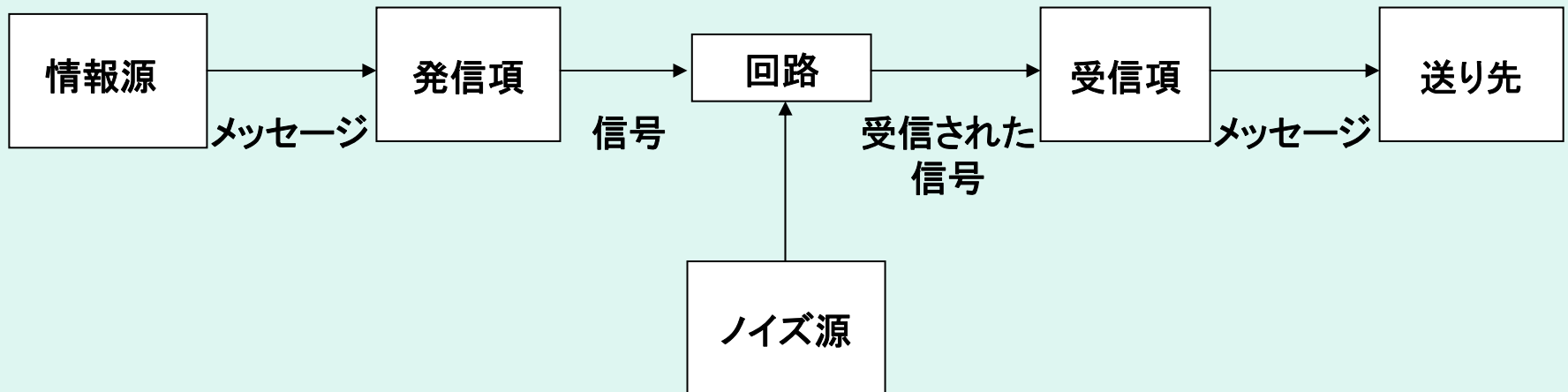
(→ 前回配布資料1参照)

Interface 2 記号と情報

「ことばの回路」に示されたコミュニケーション図式は、シャノンの「情報の回路」とどのような関係にあるのか？

→ 記号論と情報理論とのインタフェースとはなにか？

Shannon-Weaver Model



→ 前回配布資料3参照

情報と意味

Frequently the messages have *meaning*; that is they refer to or are correlated according to some system with certain physical or conceptual entities. These semantic aspects of communication are irrelevant to the engineering problem. The significant aspect is that the actual message is one *selected from a set of* possible messages. The system must be designed to operate for each possible selection, not just the one which will actually be chosen since this is unknown at the time of design.

Claude Shannon 前回配布資料3参照

「情報化」

メッセージを「工学的回路」に引き入れることによって「確率論」化すること

→ 「アナログ」から「デジタル」へ
「符号化」という「記号」化

Weaver 資料4参照

「符号化」と「分節」および 「二重分節」

- Signal とSign
- Code とLangue
- 第一次分節と二重分節
- 「符号処理」と「意味論」

「シャノン・モデル」と「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『シャノン・モデル』と『ことばの回路』
を省略させていただきます。

「情報」の人工言語

- セマンティクスなき人工言語によるコミュニケーションの数理化

→ 近世の普遍記号論の「実現」

二つの記号論の時代

- コミュニケーション世界は二つの〈記号論〉に分割される

〈情報〉の普遍記号論

と

〈意味〉の一般記号論

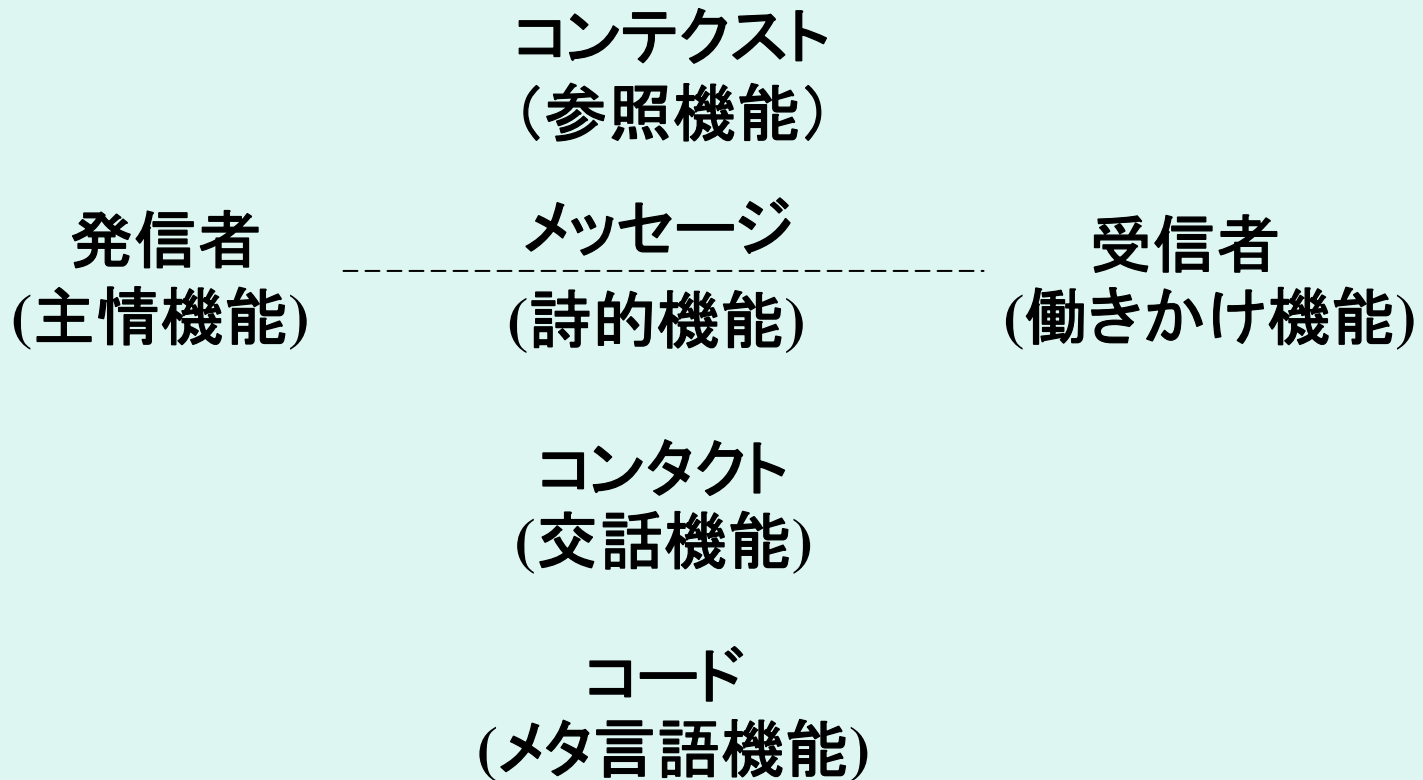
参考事例

構造主義とコミュニケーション

- 「コミュニケーションの世紀」における記号
図式
→ ヤコブソンの六機能図式

(→ 資料5参照)

ヤコブソンの「六機能図式」



ヤコブソンの記号図式

- コミュニケーションの

1. 志向性（心理/意識）
2. 記号性（記号）
3. 機能性（社会）
4. メディア性（技術）

を統合して見せた図式

（「ことばの回路」、「オルガノン・モデル」、「シャノン・モデル」、人類学の知見を統合）